

第55回中学生作文コンクール

生命保険文化センター賞

感謝

兵庫県 三木市立自由が丘中学校 三学年

三谷 愛香

ある日、母とテレビを観ていた時に生命保険のコマーシャルが流れてきました。このようなコマーシャルを最近よく目にします。よく意味が分からなかったのですが母に尋ねると、今まで聞いたこともなかった、祖母と生命保険の営業職員の方とのエピソードを話してくれました。

その営業職員さんは、母がまだ学生のころからよく家に来ていたそうです。祖母のことを「お母さん」と呼ぶくらい親しく、いつも楽しそうに話をしていたのが最初は営業職員だと気がつかなかったそうです。名前は細川さん。この細川さんが後に祖母と母の大きな心の支えになってくれるなんて思ってもいなかったそうです。

平成十二年十一月、祖母は肺にガンが見つかり闘病生活を送ることとなりました。ガンであることを祖母から聞かされた母は、身内に知らせしてから細川さんに連絡をしました。そしてガンになったことを伝えると、

「大丈夫？私にできることがあったら遠慮しないで何でも言ってね。」

と保険の手続きのことより、まだ幼い子がいる母を気遣い優しい言葉をかけてくれる細川さんに、心細かった母は勇気をもらったそうです。そして、僅かでしたがガン保険に加入していたので一時金が給付され、抗ガン剤や放射線治療の手助けとなりました。更にガンと診断されると、その後の保険料が免除される保険だったため、安心して治療に専念することができました。

ガンだと知った祖母は、母の前では気丈に振る舞い一切弱音を吐くことなく精力的に治療を行っていました。しかし、初めて細川さんが祖母の見舞いに来てくれた時に、祖母は細川さんの胸で声を上げて泣き叫んだそうです。母はそれを聞いて、細川さんがいてくれて本当によかったと心から感謝したそうです。自分の娘の前では、いつも潔く強い姿を見せていた。そんな祖母の娘への思いを察した母は、細川さんに甘えようと決めたそうです。それから細川さんは仕事の合間を縫って祖母を見舞ってくださり、祖母だけでなく母の不安な気持ちを汲んで励まし続けてくれたそうです。こうして細川さんはただの生命保険の営業職員ではなく家族と同じくらい大切に、なくてはならない存在となっていました。

それから祖母は抗ガン剤の副作用に苦しみながらも周りに支えられ、闘病生活を続けましたが、半年を過ぎたころ、ついに余命が宣告されました。母はどうしているのか分からず、祖母がいなくなるという恐怖を受け入れられずにいたそう

第55回中学生作文コンクール

です。その様子を見ていた細川さんは、祖母の保険に生前給付金があることを教えてくれました。生前給付金とは、余命が半年と診断されると死亡保険金を先に受け取れるという制度だそうです。生きていうちに望みを叶えることができる画期的な制度です。祖母になんでもしてあげられるという心の余裕ができた母は悔いなく看病ができたと言っていました。

そして平成十三年十月十五日、ついにその日が来てしまいました。祖母が旅立っていきました。最期はとても安らかだったそうです。これからたくさんの人に見送られる祖母を少しでも綺麗にしてあげたいと思った母は、祖母に化粧をしてあげようと思ったのですが、何も持っていないでした。するとそばで見守ってくれていた細川さんがそっと化粧品を差し出してくれたそうです。母は祖母に「よかったね。よかったね。」と繰り返し言ったそうです。化粧を終えると細川さんは泣きながら母を抱きしめて「よく頑張ったね。」と言ってくれたそうです。その言葉に母は今まで張りつめていた心の糸が切れ、涙が溢れ出したそうです。

母は生命保険に感謝しています。細川さんの温かい胸、優しい心、心強い言葉。決して忘れないそうです。生命保険に出会えたお陰で母の心に宝物ができました。私も細川さんのような女性になりたいと思いました。